

『今鏡』の副助詞サへ

——平安末期和文における〈周縁波及性〉の意義の一確認——

田中敏生

【論文概要】『今鏡』から副助詞サへの用例を取り上げて、この語の基本的意義を〈周縁波及性〉に求めるといふ観点から、その使われ方の記述を試みる。その際、サへの附属する成分によって用例を分かつた上で、添加にまつわる二事項の間に「本体—周縁」的な関係が見出されるかどうかという点に留意しつつ、すべての用例について検討する。そのことを通して、この語の基本的意義のありようを明らかにし、且つは、群数性と程度量性とを融合的に備えるという意味での副助詞性をも確認する。

【キーワード】今鏡 副助詞 サへ 周縁波及性 群数性 程度量性

はじめに

本稿は、『今鏡』から副助詞サへの用例を取り上げて、この語の基本的意義を〈周縁波及性〉に求めるといふ観点から、その使われ方の記述を試みるものである。

平安時代のサへは単独で取り上げられることが少く、辛うじて通観的な研究において言及を見るに留まる場合が多かったかに見受けられる（文献⑦⑧⑨）。しかしながら、この語がどのような意義的個性において添加の用法に参加し得ているのかを尋ねることはできるし、それは、この語の副助詞性を把握する上でも、また後代のタニとの交替現象を理解する上でも、役立ち得るであろう。そうした考え方から、これまで三代集や、蜻蛉・枕・大鏡といった和文について、この語の検討を試みてきた（文献⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯）。ここでは少しく時代を降って、十二世紀後半の和文である『今鏡』

に用例を求め、同様の検討を施したい。即ち、サへがある文中で用いられるとき、この語の接する語句が、他の中心的と想定される語句に対して周縁的な位置を占める要素であることを示しつつ、それと共通する在り方波及的に共有する形でその語句に添い加わることが表わすという点にこの語の基本的意義を求め、その現われれとして添加にまつわる二事項間に「本体—周縁」的な軽重差の見られることをもって基本義措定の拠り所とするという行き方を、ここでも試みる（注①）。それによって、平安末期和文におけるこの語の使用実態を些かなりとも明らかにすることができればというのが、本稿の意図するところである。

『今鏡』の成立については、序文に《今年是嘉応二年（一一一七〇年）庚寅なれば》（五八頁）とあるのが大きな手掛かりとなる。それより後の時代のものであることを示す記事の指摘によって成立年代を引き下げる説も提出されているが、嘉応元年から二年にかけて書かれたとする説が《現

段階ではもつとも説得力のある穏当なもの》(全釈・上「解説」二六頁)とされる。また作者については、藤原為経(寂超)作とする説が有力視されている(同「解説」三一―二頁。文献⑥、六四頁)。本稿でもこうした先学の知見に従いつつ、十二世紀後半に院政時代を生きた人の言葉として、その言語事象を受け止めてゆくことになるわけである。

以下本稿では、右のような考え方に基づきながら、サへの附属する成分を次のように分けた上で検討を進めるが(注②)、それは、群数性と程度量性とを両々あい重ね持つという意味でのこの語の副助詞性(注③)を、この文献での用例に即して確かめる作業ともなるであろう。

- (1) 主格成分と関わるもの 九例
- (2) 対格成分と関わるもの 一〇例
- (3) 二格の成分と関わるもの 二例
- (4) 時の成分と関わるもの 一例
- (5) 引用成分と関わるもの 四例
- (6) 形容詞連用形を承けるもの 一例

〔合計 二七例〕

一 主格成分と関わるもの

主格成分と関わるサへは九例見える。これらは、その添加にまつわる内容面でのあり方から、次のように分けておくことができる。

- I・a…或る人間から他の人間へ 四例
- I・b…(人間の)或る要素から他の要素へ 四例
- II…(外在的な)或る事物から他の事物へ 一例

〔合計 九例〕

まず、I・a〔或る人間から他の人間へ〕という形での添加が見られるのは、次のような例である。

①歌(一三八)〔上・四五七〕《誰かまた今日のみゆきを送りおかむ我さへかくて思ひ消えなば》(卷二「虫の音」)

②歌(三七五)〔下・五三八〕《住みわびて我さへ軒のしのお草しのぶかたぐしげき宿かな》(卷十・敷島の打聞)

③(三六三)〔下・四七四〕《さほどの理もなき武士(もののお)さへ、情かくばかり吹き聞かせむもあり難く。また昔の白波は、なほかゝる情なむありける》(卷九「賢き道々」)

①は、美福門院の遺骨を高野山に納めるために都を発つたとき、門院を慕う若い人が名残を惜しんで詠んだ歌である。「門院ご本人はかりでなく、自分のような者までもが(折から降りしきる雪のように)消えてしまつたら、いったい誰が今日の御出立をお見送りするであろうか」といった意味を詠み上げている。皇族の葬送という大がかりな儀式にとって、逝去なされた門院御当人に較べれば、それを見送る人などは、所詮、周縁的な位置を占めるに過ぎない。この点に、周縁波及的な添加のありようを見て取ることができよう。

②は、周防内侍が家を手放して他の場所に移るときに詠んだ歌である。金葉集(五九一)に《家を人に放ちて立つとて柱に書き付け侍ける》として載せる(本文は新大系)。周防内侍集(三〇番)の詞書には《もろともにありしはは、はらからなどもみななくなりて、心ほそくおぼえて、すみうきたびどころにわたりて、ほとけなどくやうするに、くさなごもしげくみえしかば》とある(新編大観・Ⅲ)。家の維持管理もしにくくなったのであるか。「軒」に「退き」を懸けている。他の人たちはばかりでなく、残った自分までもが去つて行くとの意であろう。他界によって人間が居なくなるのは致し方ないこととして、生きている人間までもが、もつと居続けることもできなくはないかもしれないのに去つて行く。この点に〔本体―周縁〕的なありようが備わると言えよう。

③は、筆策の名手・用光(もちみつ)が、吉備の国で海賊に襲われそう

になったとき、船の上で筆箒を吹き鳴らすことによって襲撃を免れたという記事の一節である。教養ある人士ばかりでなく、さほど洗練されていない荒武者の心にまで染み入る楽の音であったことを述べている。そうした意味を表わすのに〈周縁波及性〉の意義が用いられていると言えよう(注④)。

なお、次の例では添加の中味を具体的に決めることは難しいが、あるいはここで扱っておいてもよいかも示れない。

④(一九二)(中・一九七)《かの雲井の月詠めりし忠盛は、なか／＼に院(「白河院」崩(かく)れさせ給ひてのちにぞ、いつしか殿上許されたりし。そのとき、殿上の硯の函に書きつけられたる歌ありけり」と聞えしは、「源なる雲の上は、なにさへほるなりけり」とかや。忘れて覚え侍らず。山城と伊勢と、源と平氏(たひらうぢ)とを対したるやうにぞ聞えし。》(巻四「宇治の川瀬」)

④は、歌を引こうとしたのだが、記憶がおぼろで思い出せないむね述べている。文脈から考えて、「なに」は「名に」ではなく「何」であろう(全釈・上、四八〇頁)。全書頭注では、前田本の《山城が源なる雲の上は伊勢平氏さへ昇るなりけり》を掲げる。学術文庫でもこの歌に言及して、忠盛昇殿に対するいやがらせを(忠盛以外の人が)詠んだものと解している(二〇一頁)。こうした解によるならば、ここでのサへもまた、「人間から人間へ」という方向での添加に準じうるものとして挙げておくことができようかと思われる(注⑤)。

次に、I・b(人間の)或る要素から他の要素へ」という形での添加がなされているのは、次のような例である。

⑤(二二八)(上・四二二)《院にもとよりや思し召しつ、や過ぐしけむ、かの父(「長実」)の御忌など過ぎけるま、に、(鳥羽院からは)忍びて御消息ありて、隠れつ、参り給ひける程に、日に添へて類なき御志にて、ときめき給ふ程に、たゞならぬ事さへおはしければ、御祈りお

どろ／＼しきまで、方々せさせ給ふ程に。》(巻三「男山」)

⑥(二六二)(中・五〇)《儲けの関白、一の人の太郎君にて、あへなくなり給ひにしかば、世もくれふたがりたるけしきなりしぞかし。齢もまだ廿にだにならせ給はぬに、和歌などをかしく詠ませ給ひけるさへ、いとあはれに思ひ出でられさせ給ふ。》(巻四「梅の匂ひ」)

⑦(一九七)(中・二二〇)《手書かせ給ふことは、昔の上手にも恥ぢずおはしましけり。真字(まな)も仮名も、このもしく今めかしき方さへ添ひて、優れておはしましき。》(巻五「御笠の松」)

⑧(三六七)(下・四八七)《歌さへ、灯火の煙と覚えて、いと悲しく思ひける、理になむ。》(巻十・敷島の打聞)

⑤は、美福門院が鳥羽院の寵愛を受けていたことを述べている。「親密さが深まりを見せていった上に、お子様をお孕みになるということまで生じたので」との謂である。日ましに深まる寵愛によって強く結ばれているのだから、懐妊というできごとは、かりにそれがなかつたとしても二人の絆の鞏固さは微塵も揺るぐものではなく、この基盤からのおのずからなる展開として派生し来たった事柄に過ぎない。そうした意味で、周縁波及的な添加がなされていると見ることができよう(注⑥)。

⑥は、頼通の長男・通房が若くして亡くなったことを述べたくだりである。後文では、後拾遺集(二四五)に《待ちえたる一夜許を織女(たなばた)のあひみぬ夜半と思はましかば》の詠があることにも触れている。ただ惜しまれるばかりでなく、歌がお上手であったことなどまでもが想い起こされる、との意であろう。後継者を喪ったことを惜しみ悲しむ気持を根柢的な心情としつつ、特に歌才をめぐる追懐の念が重なり加わるということであって、そうしたあり方を表わすのが、ここでのサへであると言えよう。

⑦は、忠通(法性寺の大臣。血筋は、道長―頼通―師実―師通―忠実―忠通。弟頼長との対立でも著名)が、書の技にも堪能だったことを述べている。第五巻の巻頭を飾る人物であり、顕官歴任の記事に続けて多

方面の才芸に秀でていたことを語る一節である。伝統的な技法を十二分に習得した上に、人の心に響く新しみまで備えていたとの謂であろう。サへもまた、そうした意味を表わすのに用いられているわけである。

⑧は、男の通っていた相手の女性が亡くなったことを述べている。女性は《鳥部山谷に煙の燃えたらばはかなく消えしわれと知らなむ》という歌を残していた（第三句は、拾遺集・一三二四では「燃え立たば」。「女性の命ばかりでなく、その人の残した歌までもが煙のように儂く思いなされる」の意であろう。脆く頼りない存在のありようが、当の女性からその人の詠み残した歌へと押し及ぼされる。この点に「本体—周縁」的な関係が見て取られると言えよう（注⑦）。

さらに、Ⅱ（外在的な）或る事物から他の事物へ」という形での添加がなされているものとして、次の例を挙げることができる（注⑧）。

⑨ 〈三三二〉〔下・二九七〕《かの花園も、雲煙と登りて、跡さへ残り侍らぬと聞き侍るこそ、哀れに心憂く侍れ》（巻八「月の隠る、山のは」）

⑨は、花園の右大臣（源の有仁。後三条院の孫にあたる）が仁和寺の花園に営んでいた山荘が、彼の死後には跡形もなく消え失せてしまったことを述べている。「雲煙と登りて」は烏有に帰しての意であろう。山荘本体が潰え去ったばかりでなく、その存在の蹤跡までもが消えて残らない。そうした意味を表わすのに〈周縁波及性〉の意義が用いられていると言えよう（注⑨）。

二 対格成分と関わるもの

第二に、対格成分と関わるサへは十例見える。このうち次のような例では、動作の対象をめぐる添加がなされている。

① 〈三一八〉〔下・二二四〕《僧正歌詠みにおはして、代々の集どもにも多く入り給へるとこそ聞き侍れ。一草の庵をなほ露けしと思ひけむ漏

らぬいはやも袖はぬれけり」など詠み給へり。伝へ聞く人の袖さへ、しほりつつなむ聞え侍る。》（巻八「源氏の御息所」。流布本での末尾部分は《しほりつづくなむ聞え侍る。》）

② 〈八八〉〔上・二〇七〕《正家・匡房とて、時に優れたる一番（つが）ひの博士なるに、匡房は朝夕侍ひけり、これは御覧じも知られ参らせざりけるにこそ、つかさをさへ具して、名対面申しけむ。折節につけて、いとかどある心ばへなるべし。》（巻一「司召し」）

③ 〈一五〇〉〔上・五一四〕《二条帝は》俱舎の頌（ず）〔俱舎論の偈〕など誦（よ）ませ給ひて、軸々読み尽くさせ給ひて、その心説き現せる書ども〔俱舎論頌釈疏〕をさへ伝へ受けさせ給ひて、智慧深くおはしましけり。》（巻三「花園の匂ひ」）

④ 〈三六三〉〔下・四七三〕《白波ども、各々悲しみの心起りて、かづけものどもをさへして、漕ぎ離れて去りにけりとなむ。》（巻九「賢き道々」）

⑤ 〈一四三〉〔上・四八五〕《鳥羽院の千体の観音をだにありがたく聞え侍りしに、千手の御堂こそおぼろげの事とも聞え侍らね。熊野をさへ写して、都に造らせ給ひつらむこそ、遠く参らぬ人のためも、いかにめづらしく侍らむ。》（巻三「内宴」）

⑥ 〈三一四〉〔下・二〇五〕《かの御時、女御后、方々打ち続き多く聞え給ひしに、御心のはなにて、一時のみ、盛りすくなく聞えしに、これ〔「督の君」ぞ常磐に聞え給ひて、家をさへ作り賜はり、世にももてあつかふ程に聞え給ひて、帝の御悩にさへ、科負ひ給ひしぞかし。》（巻七「藻塩の煙」）

①は、僧正行尊（小一条院の孫にあたる）の歌才について述べている。歌は、金葉集（五三三）に、第二句「なに露けし」として載せる。詞書は《大峰の生の岩屋にてよめる》（新大系）である。「生（笙）の岩屋」は、新大系の地名索引によれば、大峰山脈の一峰・文殊岳の、上下数百メートル

ルの絶壁にある岩窟との由である。歌では、そうした巖窟における修行の辛さを詠み込んでいるが、当事者ばかりでなく歌を伝え聞く者までもが悲しみの情に搏たれるというのが、それに対する評価であろう。この点に〔本体―周縁〕的でありようが認められると言えよう。この例の場合、実質的には〔或る人から他の人へ〕といった添加のありようを見て取ることもできるであろう。

②は、内裏で火事があったとき、とっさの処置を行なった人が見慣れない人だったので誰何したところ「左小弁正家」と答えたという挿話を述べた一節である。「名前ばかりでなく官職まで付け加えて名乗った」の意であろう。個人を特定するには固有名がなによりであり、官職名は、複数の人がそれに該当するという意味では、補助的に役立つに過ぎない。この点に〔本体―周縁〕的でありようが備わると言えよう（注⑩）。

③は、二条帝が俱舎論を深く究めたことを述べている。根本經典たる俱舎論を読破したばかりでなく、その注解の書物にまで修学の手が及んだというのである。原典から注釈へという点に、〔本体―周縁〕的でありようは明らかであると言えよう。

④は、筆築の名手・用光が古備の国で海賊に襲われかけたとき、船の上で筆築を吹き鳴らすことによって襲撃を免れた話しを述べた一節である（主格成分の③にも、この挿話からの例を掲げた）。用光からすれば災厄を免れただけでも十分すぎるほどの僥倖であったはずだが、この基調要因の上に、祝儀を授かるという思いがけない余得が上乘せされる。この点に〔本体―周縁〕的でありようが備わると言えよう。

⑤は、後白河院が仏事に熱心で、三十三間堂を建て、さらに熊野三社を分祠して新熊野を造ったことを述べている。鳥羽院の千体の観音とは、白河にあった得長寿院の千体観音のことであるとされる。平の忠盛がこれを造進して鳥羽院から殿上を許された挿話はよく知られている（平家物語・殿上閣討）。鳥羽院のが観音千体だったのに対して、後白河院のは千手観

音千体なのだから一層大掛かりであり、新熊野の造営は、もしそれがなくても後白河院の事業の偉大さは毫もゆるがない。そうした意味で、周縁波及的な添加がなされていると言えよう。

⑥は、督の君と呼ばれる女性に対して二条帝の寵愛の篤かったことを述べている。「単に可愛がられただけでなく、家まで造って下さった」との意であろう。情愛を注がれるという基盤的な紐帯の上に立って、邸宅を賜るという付加的な恩恵が上乘せされる。この点に〔本体―周縁〕的でありようを読み取ることができよう。

次に掲げる例も基本的にこれまでと同じであるが、意味内容の面からは、動作の対象というよりもむしろ対象領域をめぐる添加といった気味あいが濃い。

⑦（一四二）〔上・四八〇〕《かの少納言（＝通憲）唐の文をも博く学び、やまと心もかしこかりけるにや、天文などいふ事をさへ習ひて、才ある人になむ侍りける。》（卷三「内宴」）

⑧（一四五）〔上・四九〇〕《舞姫は、今年は、麗しき女舞にて、日頃より習はされけるとぞ聞え侍りし。通憲大徳、楽の道をさへ好み知りて、さもありぬべき女どもを習はしつゝ、神の社などにも参りつゝ、舞ひあへりけりと聞き侍りし。》（卷三「をとめの姿」）

⑨（二七四）〔中・六二七〕《何ごとも艶なる方、情多くおはしまして、御手なども、美しく書かせ給ふ。絵をさへなべての筆だちにもあらずなむおはしますなる。》（卷六「宮城野」）

⑩（二四七）〔中・四八九〕《大方、早業をさへ及びなくし給ひければ、》（卷六「雁がね」）

⑦は、藤原通憲（信西）の博学宏才ぶりについて述べたくだりである。政治に携わる者としては、まずその方面の教養が第一となるはずだが、それだけに留まらず、天文などという特殊な領域のことにまで学殖が及んだということであって（注⑪）、この点に、〔本体―周縁〕的でありようが

備わると言えよう（もつとも少し後の部分では、『道の人ならぬ天文などの恐れある事なるにや。よろづめでたく侍りしに、惜しくも侍るかな』〔一四三頁〕と記されていて、専門外の事柄にまで手を出したことが平治の乱における横死の一因とされてもいる）。

⑧は、保元四年の内宴のために、通憲（信西）が舞姫の養成を行ったことを述べている。通憲は『本朝世紀』の編者としても知られているが、そうした学識一般に加えて、音楽についてまで造詣が深かったとの意であろう。ここでも⑦と同様のありようが看取されるであろう。

⑨は、多子（血筋は、師輔—公季—公成—実季—公実—実能—公能—多子。近衛・二条両帝にお仕えした所謂「二代の后」）の教養の深さについて述べている。能筆であったばかりでなく、絵の方面でも水準以上の力量を備えていたとの意であろう。色紙に三十一文字を書き付けることは当時の女性にとつて不断に必要とされる基礎教養であったが、絵筆の技はそれと同じほどには必要度が高くなかったと考えてよいであろう。そうした意味で周縁波及的な添加がなされていると言えよう。

⑩は、成通（血筋は、道長—頼宗—俊家—宗通—成通）が、多方面に優れた才能を持っていたことを述べている。笛・歌・詩といった基本的な教養ばかりでなく、今様を能くし蹴鞠・乗馬といった身体能力にも秀でていたが、さらには高欄の横木の上を歩くといった軽業的な身のこなしまでも得意であったというのである。その内容からして、「本体—周縁」的なありようは明らかであろう（注⑫）。

三 爾余の諸成分と関わるもの

第三に、二格の成分と関わるものが二例ある。

①（一九二）〔中・二〇二〕《かの宇佐の使に下られし兵衛の佐（＝長輔）は、在方と聞えし人の婿になりしが、志やなかりけむ、離れにしかば

いとくち惜しくて、なほ〔白河院の〕御気色（きそく）にて、二度までとりよせたりしかども、え住み果てざりしかば、世に歌にさへうたひてありしを。》（巻四「宇治の川瀬」）

②（三一四）〔下・二〇五〕《世にももてあつかふ程に聞え給ひて、帝の御悩にさへ、科負ひ給ひしぞかし。》（巻七「藻塩の煙」）

①は、在方の娘と長輔との仲がうまく行かなかつたことを述べている。白河院の取りなしで復縁の試みがあつたが、添い遂げることはなかつたというのである。歌は伝わらないが、二人の仲について詠まれたものである（全釈では《歌謡であろう》とする。上・四八三頁）。現実の不仲に加えて、言葉の世界においてもそれがなぞり返される。この点に周縁波及的な添加のありようを認めることができよう。

②は、督の君と呼ばれた女性が二条帝の寵愛を一身に受けたことをめぐる記事である（対格成分⑥の例も、この挿話から引いたものである）。「もてあつかふ」は「もてあます」の意であるとされる。桐壺の更衣がそうであつたように、督の君も何かと不評を被っていたが、この全般的な基調の上に、帝のご病気についても督の君のせいだと取り沙汰されるに至るわけであつて、このあり方を表わすのに〈周縁波及性〉の意義が用いられていると言えよう。

第四に、時の成分と関わるものが一例見える。

①（二二八）〔上・四一八〕《〔鳥羽院は〕この御事（＝美福門院）をのみ類なき御もてなしなれば、世の人、双びなく見奉るに、またたゞならぬ事おはしませば、この度さへ打ち続かせ給はむもくち惜しき上に、思し召し計らふ事やあらむ、男宮生み奉り給ふべき御祈り、いひ知らず當ませ給ふ。》（巻三「男山」）

右は、美福門院が近衛天皇を身ごもられた時のことを述べている。これまで二度にわたつて女宮をご出産だったという経緯がある。「この度さへ」は、「それに加えてこのたびまでも」の意である。女宮がお生まれになる

確率はそのたびごとに五分五分だとも言えるが、それがうち続く確率は累乗的に半減してゆくのだから、その意味では、あとになるほど狭まって行く。そうした意味で、「本体―周縁」的なありようが認められよう。

第五に、引用成分と関わるものが四例見える。形としては「とさへ」「なとさへ」の二つがある。

〔とさへ〕

① 〈二五九〉〔中・五四九〕《詠み給へる歌多かる中に、いと優しく聞え侍りしは、一思ひ出づやありしそのよの呉竹のあさましかりしふし所かな」と詠み給へるこそ、いづこにかいばみ〔二垣間見〕給ひけるにか侍りけむ。からうすの音して、当來の導師などや、をがみけむとさへ思ひやられ侍る。》〔卷六「竹のよ」〕

② 〈三〇七〉〔下・一五三〕《思ひもかけぬ春鳴けば憎くこそ待めれ」と、心敏(と)く答へ給ひけるこそ、いとしもなき歌詠みなどし侍らむには遙かに優りて聞えけれ。四条中納言〔二定頼〕この料に詠み置き給ひけるにやとさへ覚えて。》〔卷七「新枕」〕

〔などさへ〕

③ 〈二二〇〉〔上・三八〇〕《幼くおはしましけるより歌を好ませ給ひて、朝夕に候ふ人々に、隠し題詠ませ、紙燭の歌、金碗(かなまり)打ちて響きのうちに詠めなどさへ仰せられて、常は和歌の会ぞせさせ給ひける。》〔卷二「春の調」〕

④ 〈一三三三〉〔上・四三七〕《鳥羽の院には、次の帝定め申させ給ふに、誠にや侍りけむ、女院〔二美福門院〕の御事のいたはしさにや、姫宮〔二暲子〕を、女帝にやあるべきなどさへ計らはせ給ふ。》〔卷三「虫の音」〕

①は、公実(血筋は、師輔―公季―公成―実季―公実)の詠んだ歌の紹介とその批評である。歌は、金葉集(三六二)に《ある宮ばらに侍ける人のしのびて屋をいでて、あやしの所にて物申てまたの日つかはしけ

る)の詞書で載せる(本文は新大系)。今鏡では、「あさましかりしふし所」から夕顔の巻を連想している。「唐臼」の語は《こほく」と鳴る神よりもおどろくしく踏みとろかすから臼のおとも枕上とおほゆる、あな耳かしかましとこれにぞおほさる、》(新大系・I、一一六頁)といったふう

に用いられているし、「導師」もまた《南無(なむ) 当來導師」とぞをがむなる。》(同、一一八頁)という形で見えている。ここでのサへは、和歌自体に詠み込まれた現実の情景に加えて、昔物語の情調までもが俤として

添い加わることを表わすものであって、この点に〔本体―周縁〕的なありようを認めることができるであろう。

②は、雅定が石清水の臨時の祭(三月)の使いをしたときの、郭公の鳴き声をめぐる問答について述べた一節である。雅定が、陪従をしていた俊頼に「あれを聞いたか」と尋ねたので、「思いもかけぬ春に鳴くので癪に触ります」(注⑬)と答えた。定頼(公任子息)が《ほと、ぎす思ひもかけぬ春なけば今年ぞ待たで初音聞きつる》(後拾遺・一六二)と詠んでいたのを踏まえての返答であった。定頼の歌は三月末に詠まれたものであり、時節柄びつたりの歌である。その符合があまりに鮮やかだったので、まるで定頼がこの応答に備えて予め詠んでおいてくれたかのようだという思いが生まれて生じたというのである。現実世界での強い讚嘆の念に加えて、仮想世界での主観の真実までもが喚び起こされるということができて、この点に、「本体―周縁」的なありようを見出すことができるであろう(注⑭)。

③は、崇徳院が和歌を好んで、物の名の技巧や速詠の修練を臣下に課せられたことを述べている。紙燭が燃えつきないうちに歌を詠ませたり、さらには鏡の音の消えないうちに詠ませるといったことまで命ぜられたというのである。「紙燭の歌」であつても相当厳しい制約のだから、鏡云々のご命令は、仮にそれが下されなくても、瞬発的な和歌言語発出能力の涵養には十分に事足りたであろう。そうした意味で、「本体―周縁」的なあり

りようが備わるわけである。

④は、近衛帝がお隠れになったあとの事情を述べている。鳥羽院は、美福門院をお気の毒に思われるあまりに、女帝擁立といったことまでお考えになったというのである。通常なら男宮から選ぶはずであり、現に雅仁親王（鳥羽院四宮・後の後白河帝）、守仁親王（雅仁の子・後の一条帝）、重仁親王（崇徳院一宮）などの候補もあつたわけだが（全釈・上、二九二頁。學術文庫・上、四四二頁）、決めかねる余りに八条院（暉子・母は美福門院）の擁立といったことまで考えるに及んだということなのであろう。こうした点に、周縁波及的な添加のありようが認められると言えよう。

最後に、形容詞連用形を承けるものが一例見える。

① 〈三三三〉〔下・二九七〕《この大将殿（＝源有仁）帝（＝後三条院）の孫（むまご）にて、たゞ人になり給へる、この世にはめづらしく聞き奉るに、情多くさへおはしける。いとありがたく聞き奉りしに、たゞ盛りにて、雲隠れ給ひにけむ、いと悲しくこそ侍れ。》（巻八「月の隠る、山のは」）

右は、有仁の死去をめぐる記事の一節である。臣籍に下つただけでも珍らしいことであるのに、文芸風流の心も備えていたのが、たいへん貴く思われたことを述べている。社会的な地位をめぐる恬淡さという基調的な美質に加えて、心情面での細やかさをも持ち合わせているということであつて、この点に「本体―周縁」的なありようが見出されると言えよう。

むすび

以上、『今鏡』のサへ凡そ二十七例を取り上げて、その使われ方を検討してきた。そのそれぞれの用例において〈周縁波及性〉の意義の發揮されているありさまが観察されたのではないかと思われる。大要を示せば、主格成分にあつては人間どうしやその要素間、さらには外在的な要素間にお

いて「本体―周縁」的な添加のありようが見られたし、対格成分や爾余の成分についても、それぞれに同様の関係を見出すことができたと言えよう。この文献では、以上のようなありようにおいて、サへが〈周縁波及性〉の意義を備えると考えてよいであらう。

この語の副助詞性ということも、こうした基本的意義との関連において理解することができる。サへは、二事項の関係を表わす点で群数性を有するとともに、その関係規定が軽重差を孕むという限りに程度量性をも帯びるのであつて、この両契機の融合的な重なり合いにおいて、確たる副助詞性を備えると認め得るであらう。『あゆひ抄』がこの語を「だに家」（文献⑱、二四三頁）に撰することの理由もまた、この点から了解されるわけがある。

最後に、サへの用いられる構文環境という方面については、次のような点に目が止められる。

第一に、仮定条件句で使われたものが一例見える。

・《我さへかくて思ひ消えなば》（主格・①）

仮定条件句で使われるサへは、蜻蛉には五例見られたが、枕や大鏡には見えなかった。和歌の用例であり、美福門院崩御（永暦元年＝一一六〇年）のときのものであるが、この種の使われ方がなお減びきつてはいなかったということにならう。

第二に、否定述語で用いられるものも一例見える。

・《かの花園も、雲煙と登りて、跡さへ残り侍らぬと聞き侍こそ、》（主格・⑨）

否定述語で用いられるサへは、蜻蛉では六例見られた（四例は仮定条件句と重なる）が、枕では一例であり、大鏡でも一例見られるかといった状態であった。今鏡にあつても、この言い方のなお存続していたことが知られる。そしてそれは、注⑨でも述べたように、否定的事態全体に対して、その外側から働くものでもあつた。この点は枕や大鏡と同質的なありようを

示していると言えよう。

第三に、命令・希求など実現を待ち望む文で用いられたサへは、今鏡には見えない。蜻蛉・枕・大鏡も、同じ状態であった。

周知のように、後代になるとサへがダニの後継者となって仮定条件句や否定述語での用法を（類推用法とともに）引き継ぐことになる。そうした交替現象をより細かく考えるためにも、この種の事象に対して視線を投じておく必要があるかと思われる。

冒頭にも述べたとおり、平安時代のサへについての詳しい実態の解明はあまり進んでいないように見受けられる。本稿でこのような記述を試みてきたのも、その補いの一助にでもなればとの思いからであった。

〔付記〕『今鏡』の本文は次の文献を用いた。

- ・朝日古典全書『今鏡』（板橋倫行校註 朝日新聞社 一九五〇。本
文は畠山本）

本文の解釈等には次の文献を参考した。

- ・海野泰男『今鏡全釈（上・下）』（福式書店 一九八四。本文は畠山本）
- ・講談社学術文庫『今鏡（上・中・下）』（竹鼻績訳注 講談社 一九
八四。本文は慶安三年刊本〔流布本〕）。

用例の掲出にあたっては次のような行き方を取った。

- ・用例の頭に朝日古典全書頁数を（一三八）のように（ ）に括つて掲げ、続けて講談社学術文庫の巻数と頁数とを〔上・四五七〕の
ように示した。

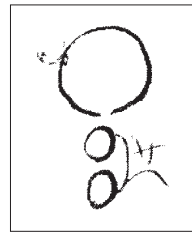
- ・文章中に歌が引用される場合は――に括って示した。
- ・正漢字は新漢字に改めた。

- ・振り仮名を適宜（ ）に括って示した。
- ・引用者による注解を（ ）に括って挿入した。

これらの書物の参照に際しては、「全書」「全釈」「学術文庫」等々の略称を適宜用いた。

注

〔注①〕サへの基本的意義についてのこのような捉え方は、夙く『稿本あゆひ抄』の欄外に見える図形にその淵源を窺うことができる。そこでは、大きな円の下に小さな円が二つ並び、その傍らにサへと記されている（文献⑨、三九四頁。文献⑩、一一頁。上図は後者による。また、松尾捨治郎『国語法論攷』（文献⑫、四五六頁）にもサへを『副貳的』とする見解が明瞭に述べられている。



本稿でのサへの捉え方も、これまでと同様、これら先学の知見から大きな示唆を得ている。

〔注②〕流布本にだけ見える次の二例は、用例から除いてある。

- ・（下・二二〇）《かく末さへ広ごらせ給へる》（巻七・藻塩の煙）（全書・三二五）《かく末栄え広ごらせ給へり「栄え」とあって、サへは見えない》
- ・（中・六一五）《年老いたる人など、涙をさへながして、席（むしろ）こぞりて賞（め）で思へり》（巻六・花散る庭の面）（全書・二七二）

《年老いたる人など、涙抑へなどして（サへは見えない）》。サへの附属する成分別のありようを、これまでに調査した平安朝六作品と対照すると【表Ⅰ】のようになる。

【表Ⅰ】

	古	今	後撰	拾遺	蜻蛉	枕	大鏡	今鏡
主格	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
対格	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
二格	三	五	二	二	七	一一	一一	一〇
時	五	三	五	一	六	五	二	二
引用	／	／	／	一	三	二	／	一
その他	一	一	一	／	／	／	一	一
述語	／	／	／	／	／	一	／	／
計	三三二	三三二	二五	三〇	四五	二二二	二二七	

なお文献⑫の注⑬の表や、文献⑬の注②の表Ⅰでは、枕の主格を「二八」

例としていたが、「一九」例に改める(文献⑯では実際に十九例を掲げている)。

〔注③〕 群数性および程度量性を根幹として副助詞の類性格を把握する見方は、文献⑮に基づく。この観点を取るこの意味については、文献⑪の「むすび」参照。

〔注④〕 用光のこの話は有名であったらしく、十訓抄(第十二七話)や著聞集(巻十二・偷盜第十九・四三〇話)にも類話が見える。

〔注⑤〕 「宇治の川瀬」の巻については、文献②に評論が見える。ここでは、忠実伝からの逸脱に作者の興味の在りどころを透かし視る形で、政治意識のありようが論じられている。

〔注⑥〕 このあたりの叙述は、桐壺の巻を頭に置いているらしく、《や、朝政事も怠らせ給ふさまにて》(二七頁)、《いとやむごとなき際にはあらねど》(同)などの文言が見られる。ただし前者の「朝まつりごと」は、源語では更衣後帝が悲嘆に暮れる場面に出てくる(新大系・I、一七頁)。御子の懐妊についても《世になくきよなる玉のをの子御子さへ生まれ給ひぬ》(同、五頁)の一節が想起されよう。

〔注⑦〕 今昔物語集(巻三・第八話)「灯火に影移りて死にたる女の語」に類話があり、男は藤原隆経、女は小中将として登場する(新大系・V、四五頁)。

〔注⑧〕 主格成分と関わるサへの内容面でのあり方は、枕草子では四類五種のタイプが見られた(文献⑯)。今鏡では、そのうちのI・aとI・b、それにIVに対応するものが見出されたことになる。なお、蜻蛉日記では、そのうちのIIIを除いた四つの小類が見られた(文献⑰)。ここでは、「外在的な事物」は「自然」に限られる。また大鏡ではI・bとIIとに対応するものが見出された(文献⑱)。これらを、種類の最も多い枕草子を中心にしてまとめると【表II】のようになる(蜻蛉日記・大鏡・今鏡の分類番号は、文献⑱および本稿で用いたものをそのまま記している)。

【表II】

枕草子		蜻蛉	大鏡	今鏡
I・a	或る人間から他の人間へ	I・a	/	I・a
I・b	(人間の)或る要素から他の要素へ	I・b	I	I・b
II	人間から外在的な事物へ	II	II	/
III	外在的な事物から人間へ	/	/	/
IV	(外在的な)或る事物から他の事物へ	III	/	II

用例数について記すと、大鏡では主格成分よりも対格成分のほうが遙かに多かったが(六例・一一例)、今鏡ではそれほどの径庭は見られなかったことになる(九例・一〇例)。

〔注⑨〕 ここでのサへは肯定的事態全体に対して、言わばその外側から働いている。現代語のマデにまつわる文献⑲の用語を当てはめれば「Wスコープ」ということになる。

〔注⑩〕 「司召し」の巻の持つ作品性格上の意義については、文献①に詳しい。ここでは、匡房や実政といった学者たちの芸文韻事による政治との関わり方が論じられているが、正家も文章博士であったことから、それに続けて登場しているむね注記されている(五五頁の注⑩)。話柄については《官職に関する正家の才気を伝える話》と概括されている(同)。

〔注⑪〕 文献⑲(三八六頁)には、通憲の「本朝世紀」に天文に関する記事が相当詳しく見えるむね指摘されており、現にこの文献でも、通憲のこの書が歴史記述依拠資料の一つとなっている。なお通憲は、日本数学史の見地からも注目されており、文献⑵(二二三頁)に次のような記載が見える。

・《後白河天皇、保元年間、日向守通憲、計子算法を述ぶ》
 ・この記事の直接の拠り所ではないかもしれないが、愚管抄(巻五)には次のような一節があって、文献⑲(二一頁・一六〇頁)でも言及・引用されている。内裏造営に関わるくだりであり、彼が実践的な算木操作適用能力の持ち主だったことが知られる。

・《信西ガハタ／＼ト折ヲ得テ、メデタク／＼サタシテ、諸国七道少シノワヅラヒモナク、サハ／＼トタゞ二年ガ程ニツクリ出シテケリ。ソノ間手ヅカラ終夜算ヲオキケル。後夜方ニハ算ノ音ナリケル、コエスマテタウトカリケル、ナド人沙汰シケリ。サテヒシト功程ヲカンガハテ、諸国ニスタクナ／＼トアテ、誠ニメデタクナリニケリ。》(旧大系、二二五―六頁)

〔注⑫〕 成通は、今鏡の中でも《特別の関心をもつて記述されている》人物であるとされる(文献⑳、一六頁。文献⑳④にも言及が見える)。

〔注⑬〕 俊頼の答えは流布本では《思ひかけぬ春なけばこそはべめれ》(学術文庫・下、一五三)とあり、同書の訳は《「思ひかけぬ春なけば」という感じでございます》である。このほうが意味としては自然だが、姑く全書本文のまま解しておいた。

〔注⑭〕 雅定という人物の全体像については文献⑳に詳しい。ここでは、才芸を基幹としての、彼の官僚貴族社会にける随順と超出との二面が、『今鏡』の根本性格との関連において論じられている(同種の観点は、文献㉒に

も見える)。

参考文献

- ① 海野泰男(一九七六)「司召し」の巻について―『今鏡』小論―『常葉学園短期大学紀要』八号
- ② 海野泰男(一九七七)「宇治の川瀬」の巻について―『今鏡』小論(二)―『常葉学園短期大学紀要』九号
- ③ 海野泰男(一九七八)「今鏡」の人物描写―頼宗流の人々をめぐって―『常葉国文』三号
- ④ 海野泰男(二〇〇三)「源雅定―『今鏡』の人々―」『常葉国文』二七号
- ⑤ 遠藤利貞(三上義夫編・平山諦補訂 一九八二)『増修日本数学史』(恒星社厚生閣)
- ⑥ 加納重文(一九九七)『今鏡研究史』『歴史物語講座 第四巻 今鏡』(風間書房)
- ⑦ 此島正年(一九六六)『国語助詞の研究』(桜楓社)
- ⑧ 鈴木ひとみ(二〇〇五)『副助詞サエ(サへ)の用法とその変遷―ダニとの関連において―』『日本語学論集』一号(東京大学)
- ⑨ 竹岡正夫(編)(一九六二)『富士谷成章全集・上』(風間書房)
- ⑩ 竹岡正夫(解説)(一九七八)『稿本あゆみ抄』(勉誠社文庫・四五)
- ⑪ 田中敏生(二〇二二)『古今和歌集』の副助詞タニ―〈相対的軽少性〉の意義をめぐって―『四国大学紀要』(人文) 三三八号
- ⑫ 田中敏生(二〇二二)『古今和歌集』の副助詞「サへ」―基本義〈周縁波及性〉措定の試み―『言語文化』一〇号(四国大学)
- ⑬ 田中敏生(二〇二三)『後撰和歌集』の副助詞サへ―平安朝和歌における〈周縁波及性〉の意義の一確認―『四国大学紀要』(人文) 三九号
- ⑭ 田中敏生(二〇二三)『拾遺和歌集』の副助詞サへ―平安朝和歌における〈周縁波及性〉の意義の一確認(其二)―『四国大学紀要』(人文) 四〇号
- ⑮ 田中敏生(二〇一四)『蜻蛉日記』の副助詞サへ―平安朝和文における〈周縁波及性〉の意義の一確認―『四国大学紀要』(人文) 四三三号
- ⑯ 田中敏生(二〇一四)『枕草子』の副助詞サへ―平安朝和文における〈周縁波及性〉の意義の一確認(其二)―『言語文化』一二号(四国大学)
- ⑰ 田中敏生(二〇一五)『大鏡』の副助詞サへ―平安朝和文における〈周縁波及性〉の意義の一確認(其三)―『四国大学紀要』(人文) 四四号

- ⑱ 田村清子(一九八四)「副助詞の変遷―その契機の解明を中心に―」『国語と教育』九号(長崎大学)
- ⑲ 中田祝夫・竹岡正夫(一九六〇)『あゆみ抄新注』(風間書房)
- ⑳ 日本学士院日本科学史刊行会(一九五四)『明治前日本科学史 第一巻』(岩波書店)
- ㉑ 日本学士院日本科学史刊行会(一九七九)『明治前日本天文学史 新訂版』(野間科学医学研究資料館)
- ㉒ 原田隆吉(一九五五)『今鏡の思想(二)』『芸芸研究』二〇集(東北大学)
- ㉓ 松尾捨治郎(一九三六)『国語法論攷』(白帝社追補版(一九七〇)による)
- ㉔ 茂木俊伸(一九九九)「とりたて詞「まで」「さえ」について―否定との関わりから―」『日本語と日本文学』二八号(筑波大学)(著者pdf版による)
- ㉕ 森重敏(一九五四)『群教および程度量としての副助詞』『国語国文』一三三巻二号

(田中敏生 四国大学文学部国語学研究室)